

第19講 ようやく登場、「拡張動詞」と申します

本講の課題である、「他動詞」の分類の最後は、「拡張動詞」です

「拡張動詞」とは、「目的役」と、『その「目的役」の具体的内容・状態を説明する「補役』』の2つの「文役」を支配する「他動詞」です

また、「拡張動詞」を使った『文。』を本書では「拡張文型」といいます

「目的役」と「補役」のあいだには、≪「主語」「述語」の関係（「主述関係」）≫があります（ここに「拡がる叙述」という「拡張動詞」の命名の由来があります）

拡張動詞 + 目的役 (①) + 補役 (②)

例えば、動詞によって、「①を（が）②だと思う」、「①を（が）②だとわかる」、「①を（が）②だと考える」、「①を②のままにする」等の意味があげられます

①、 I think him a clever man.
目的役 補役 名補句
「私は彼はかしこい男だと思う。」

②、 I found him clever.
目的役 補役 形容補語
「私は彼がかしこいとわかった。」

「目的役」と「補役」には主述関係があり、≪「目的役」＝「補役」≫の関係にあると説明されます

ですから、次のように、明確な「主述関係」をもつ「that名節」に書き換えられる場合もあります

I think that he is a clever man.
「that名節」中の「名補句」

I found that he was clever.
「that名節」中の「形容補語」

すべてが、「t h a t 名節」に書き換えられるわけではありませんが、書き換えられる場合があることから、「主述関係」にあるのが、よく理解できると思います

この「t h a t 名節」の中身は、明確な「主述関係」がある「補完文型」ですが、「補完文型」の「補役」は、「主部」を説明するので「主格補役」といわれます

「拡張文型」の場合は、「目的役」を説明するのですから「目的格補役」とよばれます

実態的には、「拡張文型」は「拡張動詞」のあとに、「補完文型」を抱え込んでいるということになります

また、「補完文型」でみたのと同様に、㊦の『文。』の「man」は「名補語」で、「a clever man」が「名補句」であり、㊧の『文。』の「clever」は「形容補語」となります（「形容補役」の認識は重要なので、以下に「形容詞系」の表を再掲します）

「補役」になる形容詞系のまとめ

形容詞系 「補役」になる	①形容語
	②不定詞の形容詞的用法
	③能動分詞（現在分詞）の形容詞的用法
	④受動分詞（過去分詞）の形容詞的用法
	⑤完了分詞（過去分詞）の形容詞的用法
	⑥形容句
	⑦形容詞化された副語

前講に引き続き、「leave」の例文で、「文型」の完全理解をしてください
「leave」の「目的格補役」は「形容詞系」のおおよそが「補役」になれるので、理解が深まるかと思います（例文の番号は、上の表の番号と一致します）

「leaveの拡張文型」の例文 （二重下線部が「目的格形容補役」です）

- ① He left the door open.
（ドアを開けたままにした）
- ② He left them to finish the work.
（彼らにその仕事を終わらせるのを任せた）

③ He left them waiting.

(彼らを待たせておいた)

He left the machine running.

(その機械を動かしたままにしておいた)

④⑤ He left his work undone.

(仕事をなさないままにしておいた)

⑥ He left her in charge (of the store).

(彼女にその店の管理を任せた)

He left her out of his team.

(彼女を彼のチームから排除しておいた)

He left her for dead.

(彼女を死んだ状態のものだと放置しておいた→死んだものとあきらめた)

⑦ He left the light on.

(電灯をつけたままにしておいた)

以上で、基本的な「文型」を全て見てきました

『文。』の「構造把握」という「考え方」がわかってきたでしょうか

「英語が苦手な方」は、絶対に「英文」を「感覚・フィーリング」や「単語の意味の追っかけ」で読んではいけません

ひたすら、「文法理論」を駆使して、すなわち「品詞分解」「構造把握」をして、緻密に論理的に分析的に読むしか英文に対する苦手意識の打開策・克服法はないのです

「英文法」は難しいと思っている方が多いでしょうが、実は、「英文法」は「誰でも英文が読めるようになるための」「簡便な」「理論的な」「手段」「道具」であることがもう得心できたでしょう(もちろん、従来の無体系・無理論・無秩序・羅列は理解に苦しむ難しいものでした)

次講では、特別な種類の「拡張動詞」について見ていきます

その前に、補足しておきます

以下の「補足 その2～4」は、はじめのうちは流すか飛ばすかしてください

「受動態の後ろに残るもの」 その2

第16講の最後で学習した「受動態（受動分詞）の後ろに残るもの」という「問題点」に関して、「授与文型」と「拡張文型」の具体的な例文をあげておきます
はじめのうちは、これを意識することが大切です（特に「残るもの」が「名節」の場合などには注意が必要です→後述「その2」を参照してください）

(第16講の「受動態の後ろに残るもの」から引き継いでいます)(二重下線部分が残存物です)

②「授与文型」(第20講参照)の「元・人目的」もしくは「元・物目的」

She gave him her book .

「人目的」を「主部」とする場合

He was given her book by her.

「物目的」を「主部」とする場合

Her book was given him by her.

③「**拡術文型**」(第21講参照)の「**元・名補役**」や「**元・形補役**」

㊦、 They found him a clever man.

目的役
名補役
(注)

He was found a clever man by them.

③、They found him clever.
目的役 形補役

He was found clever by them.

④「いくら「名詞」であっても、「補役」を「主部」にして「受動態」に書き換えることはできないことに注意してください」

さらに、補足させていただきます（はじめのうちは、流すか飛ばすかしてください）

「受動態の後ろに残るもの」 その3

「群動詞」といわれているものの「受動態」の処理にも注意が必要です
「群動詞」は≪複数語の集合体がひとつの他動詞として働くもの≫で、

①「他動詞」＋「目的役」＋「副語」

（「他動詞」＋「副語」＋「目的役」 → 「副語」は位置の変更が可能）

②「他動詞」＋「固有の目的役」＋「成句詞」＋「後属役（→目的役となる）」

③「自動詞」＋「成句詞」＋「後属役（→目的役となる）」

④「自動詞」＋「副語」＋「成句詞」＋「後属役（→目的役となる）」

の4種があります

「群他動詞」の『文。』を「受動態」にすると、「主部」になった「目的役」・「本来、後属役で目的役になったもの」以外の取り残された部分（二重下線部）が「浮いて見えたり」「違和感があったり」「意味不明に思えたり」するので
これらが、「受動態」（「受動分詞」）の後ろにある「厄介な残存物」です

群他動詞4種の「受動態」

①「他動詞」＋「目的役」＋「副語」（「他動詞」＋「副語」＋「目的役」）の場合

She turned the radio off.

目

副語

The radio was turned off by her.

②「他動詞」＋「固有の目的役」＋「成句詞」＋「後属役（→目的役）」の場合

She takes great care of her mother.

固有の目的役

成句詞

後属役（→目的役）

ふたつの「目的役」があり、ふたつの「受動態」があることに注意してください

Her mother is taken great care of by her.

Great care is taken of her mother by her.

③「自動詞」＋「成句詞」＋「後属役（→目的役）」の場合 （「群他動詞」＋「目的役」）

They laughed at the boy.
自 成句詞 後属役（→目的役）

The boy was laughed at by them.

「laughed at」で、「他動詞」の働きをしていると見るのです
「群他動詞」という考え方の典型ともいえます

④「自動詞」＋「副語」＋「成句詞」＋「後属役（→目的役）」の場合

They speak ill of the girl.
自 副語 成句詞 後属役（→目的役）

The girl is spoken ill of by them.

以上、確実に、「能動態⇄受動態」の「往復」ができるようになってください

「受動態の後ろに残るもの」 その4

「授与文型」の「物目的」が「名節」の場合

He told me that she was sick.
人目的 名節物目的

「人目的」を「主部」とする場合

I was told that she was sick by him.

「名節物目的」を「主部」とする場合は、次の項目を参照してください

「 I t i s s a i d t h a t ~ 」の「実体」

ここで、「 I t i s s a i d t h a t ~ 」が「熟語」だと思っていることが負けのはじまりという点について、見ておきましょう

T h e y s a y s t h a t s h e i s a g e n i u s .

「 t h a t 名目的節」を「主役」にします

T h a t s h e i s a g e n i u s i s s a i d b y t h e m.

「 t h a t 名主（役）節」を「仮主語 I t」に置き換え、「 b y t h e m」を省略します

I t i s s a i d t h a t s h e i s a g e n i u s.

というだけのことです

「熟語」でも何でもありませんね

本来的な「熟語」の範囲・定義は、「慣用的に言い慣わされている表現で、文法的説明がほぼ不可能なもの」という具合で、はじめのうちは学習すべきでしょう

なんでもかんでも「熟語」として「まる暗記」することはやめましょう
「品詞分解」「構造分析」「構造把握」で読む技術を身につけてください

特に、「受動態」の場合、元の『文。』を復元しながら、「受動分詞」の後にある「残存物」の「存在根拠」を考えてください（単純・純粋な「副詞」との峻別に要注意）

単なる「副詞」なのか、「元人目的」「元物目的」「元補役」「群他動詞の構成語」「あとひき他動詞の後の固有必須の副句」などに注意しながら「構造把握」をして、「受動態」の『文。』を読むようにしてください

『「受動態」の『文。』を見たら、元の『文。』を復元し、回帰せよ！』

「拡張動詞」も「受動態」も、ご納得いただけたと思います

それでは、次講では、特殊な「拡張動詞」である、「使役動詞」と「知覚動詞」と言われているものを整理してみましょう